

鳴門教育大学附属幼稚園
学 校 関 係 者 評 価 報 告 書
(令和 5 年度)

令和 6 年 3 月

学校関係者評価委員会

目 次

<u>学校関係者評価委員会が実施した学校評価について</u>	1
<u>I 学校関係者評価結果</u>	3
<u>II 評価項目ごとの評価</u>	5
<u>評価項目 1 教育課程・指導</u>	5
<u>評価項目 2 保健安全管理</u>	5
<u>評価項目 3 組織運営</u>	6
<u>評価項目 4 研究と研修</u>	6
<u>評価項目 5 教育環境整備</u>	7
<u>評価項目 6 教育実習</u>	8
<u>参考：学校の現況及び目的</u>	9

学校関係者評価委員会が実施した学校評価について

はじめに

本報告書は学校評議員、大学教員、附属学校部会の組織体として連関する公立幼稚園園長、保護者等の学校関係者で構成された鳴門教育大学附属幼稚園学校関係者評価委員会が附属幼稚園の教育・研究活動の観察及び園長をはじめとする教職員との意見交換等を通じて同園の自己評価結果について概評することを基本に学校関係者評価を実施し、その結果を取りまとめたものである。

1 学校評価の目的

学校評価は、次の3つを目的として実施するものである。

- ① 学校が自らの教育活動その他の学校運営について、目指すべき目標を設定し、その達成状況や達成に向けた取組の適切さ等について評価することにより、学校として組織的・継続的な改善を図ること。
- ② 学校が自己評価及び保護者など学校関係者等による評価の実施とその結果の公表・説明により、適切に説明責任を果たすとともに、保護者、地域住民等から理解と参画を得て、学校・家庭・地域の連携協力による学校づくりを進めること。
- ③ 学校の設置者等が、学校評価の結果に応じて、学校に対する支援や条件整備等の改善措置を講ずることにより、一定水準の教育の質を保証し、その向上を図ること。

2 学校評価に係る実施スケジュール

- 令和5年5月 第1回学校関係者評価委員会(委員長の選出, 令和5年度自己評価に係る目標及び評価項目について, 学校評価に係る実施スケジュール等)。
- 令和5年5月 学校関係者評価委員による施設見学, 保育・園行事等の参観及び教職員
～6年3月 との意見交換(幼児教育研究会等)。
- 令和6年2月 第2回学校関係者評価委員会(自己評価の結果及び改善方策等に関する説明を受けての学校関係者評価の実施と評価報告書の作成等)。

3 学校関係者評価委員会委員(令和6年3月現在)

- 木下 光二：鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻
教員養成特別コース 教授
- 近久 博州：附属幼稚園みどり会会長
- 山越 明：徳島文理大学短期大学部 保育科 准教授
- 湯地 宏樹：鳴門教育大学大学院学校教育研究科高度学校教育実践専攻
幼児教育コース 教授

(50音順, ○は委員長)

4 本評価報告書の内容

(1) 「Ⅰ 学校関係者評価結果」

「Ⅰ 学校関係者評価結果」では、「Ⅱ 評価項目ごとの評価」において、評価項目 1 から 6 のすべての評価項目の内容を総合的に判断し、4 段階評価で記述した。

【4 段階評価の基準】

- A 十分達成されている
- B 達成されている
- C 取り組まれているが、成果が十分でない
- D 取組が不十分である

また、学校の目的に照らして、「主な優れた点」、「主な改善を要する点」を抽出し、上記結果と併記した。

(2) 「Ⅱ 評価項目ごとの評価」

「Ⅱ 評価項目ごとの評価」では、評価項目 1 から 6 において、当該評価項目が達成されているかどうかの「評価結果」（4 段階評価）及びその「評価結果の根拠・理由」を記述した。

(3) 「参考」

「参考」では、自己評価書に掲載されている「Ⅰ 学校の現況及び目的」を転載した。

5 本評価報告書の公表

本報告書は、鳴門教育大学に提供するとともに、設置者に提出する。またウェブページ (<http://www.naruto-u.ac.jp/schools/06/002.html>) への掲載を通じて、広く社会に公表する。

I 学校関係者評価結果

鳴門教育大学附属幼稚園の学校関係者評価は内容を総合し、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断した。

今年度は、新型コロナウイルスも感染症法上の5類感染症に位置付いたことを受け、感染対策を徹底しながら、コロナ禍前に実施していた園行事を再開したり、保護者の協力のもとみどり会（保護者会）活動を再開して保育環境の充実を図ったり、園内研究会を公開で実施したり、幼児教育研究会においては対面とリモートのハイブリッド方式で開催したりするなど、ウイズ・コロナ時代の教育・研究のあり方に果敢に挑戦している。

教員養成大学の附属幼稚園として、①大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学研究を行う研究幼稚園としての使命、②地域の教育課題の解明、参観者への指導・助言、文部科学省・県教委・地教委等からの要請による教員派遣など教育界の発展に寄与する使命、③鳴門教育大学の学部学生及び大学院生の教育実習等を行う使命を十分に果たしているといえる。

主な優れた点について、以下に列举する。

- 「1 教育課程・指導」においては、本園は教育課程・指導計画である「生活プラン」に基づき、不断のカリキュラム・マネジメントが実施されている。幼小中一貫型教育プラン「幼小連携の科学的思考力涵養のプログラム」によって幼児期から児童期の発達や学びの具体的な姿として可視化し、指導の反省と改善に生かしている。文部科学省は社会に開かれた教育課程や幼保小の架け橋プログラムの実現を推進しているが、すでに先駆的にこれらを実行していることは特筆すべき点である。
- 「2 保健安全管理」においては、保健計画に基づき全職員による保健指導体制での保健管理が適切に実施されており、保護者に対しては「ほけんだより」などで随時情報を提供するなど園と家庭の共通理解を図っている。心肺蘇生法に加えて食物アレルギーの講習会を実施したり、危機管理マニュアル（安全管理計画）に基づき、定期的な安全点検や防災・避難訓練を実施したりするなど危機管理体制が十分に機能している。
- 「3 組織運営」においては、園長・部内教頭のリーダーシップのもと、研究部・教育実習部・教務部のそれぞれに主任を配置し、全教職員が園務分掌に従って幼稚園運営が円滑に行われている。少数精鋭主義に徹して、職員が互いに協力して園務の能率化・省力化が図れるよう配慮するとともに、各種行事における責任者を分担制（主任・副主任）にし、園経営に主体的に参加できるように努めている。
- 「4 研究と研修」においては、園内研究会・合同研究会において「遊誘財」の研究を継続的に行うとともに、今年度も幼児教育研究会には全国から多くの参加者があった。徳島県教育委員会や大学と連携を密にしつつ、文部科学省や国立教育研究所をはじめ、県内外からの多数の要請に応じて研修会などの講演などを精力的に行っているなど、その実績や貢献度は高く評価できる。

- 「5 教育環境整備」においては、オープンスクールの・アンケートにおける「環境整備について」の高い評価から裏付けられているように、幼児の生活や遊びが充実するための教育環境の整備に常に配慮されている。また、点検システムを確立させることで、職員の安全に対する意識を高め、潜在事故の危険性や修理・修繕を必要とする箇所を確実に見つけ出し、附属学校係や大学施設課と連携しながら迅速な対応がなされている。
- 「6 教育実習」においては、ふれあい実習、附属学校園観察実習、附属学校園実習オリエンテーション、附属学校園実習、基礎インターンシップ、総合インターンシップⅠ・Ⅱ、幼児教育実践フィールド研究Ⅰ・Ⅱなど年間をとおして多数の実習生を受け入れており、基礎的な保育実践力や態度及びカリキュラム・マネジメント力を育成するために、綿密な実地教育計画に基づき、ICTなども効果的に活用しながらきめ細やかな指導が行われている。

主な改善を要する点について、以下に列挙する。

- 「3 組織運営」においては、園長・部内教頭のリーダーシップのもと、少数精鋭主義に徹して、職員が互いに協力して園務の能率化・省力化が図れるよう務めてはいるが、個々の職員の負担は大きく、職員の使命感や善意のもと成り立っている感がある。今後も現行のように園教育を充実させ、文科省や他機関と連携した研究及び実践、附属学校の使命である教育実習を行うのにはぎりぎりの状況である。働き方改革が取りざたされている昨今、現行の体制を維持するには定員増も視野に入れて考える必要がある。
- 「4 研究と研修」においては、昨年度の幼児教育研究会を対面とリモートのハイブリッドで開催した実績を活かして本年度もハイブリッドで開催し成功を収めた。対面、リモートのどちらもメリットとデメリットがある。ハイブリッド開催にするとコストと職員負担は大きくなる。今後もウイズ・コロナ時代の公開研究会のあり方を確立するために、感染状況を考慮しつつ効果的な開催方法を考えていく必要がある。
- 「5 教育環境整備」において、安全管理体制と設置者との連携によって、潜在事故の危険性の回避や補修工事がなされたが、園舎全体に老朽化が目立ち、部分補修でしのいでいるという実態がある。上記の優れた実践や実績から裏付けられているように、本園は本学の教育・研究活動に貢献に留まらず、幼児教育界においても先導的な役割を果たしている。幼児の安心・安全を保障し、家庭や地域における幼児教育の拠点としてさらに発展するために「幼児教育センター」を見据えた園舎の建設を設置者側に要請したい。

Ⅱ 評価項目ごとの評価

評価項目 1 教育課程・指導

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4 段階評価中の「A 十分達成されている」と判断された。

(評価結果の根拠・理由)

観点 1-1 幼稚園教育要領の内容に沿った幼児の発達に即した指導の状況

「生活プラン」（別添資料 1-③）の月別指導計画シートを作成し、指導の評価を定期的に実施したり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点からの評価を取り入れたりするなど組織的・計画的にカリキュラム・マネジメントを実施している。「令和 5 年度附属幼稚園オープンスクールアンケート集計結果」（別添資料 1-①）、「令和 5 年度幼稚園評価アンケート結果報告書」（別添資料 1-②）においても保護者及び関係者から高い評価が得られていることから優れた取り組みであると判断される。

観点 1-2 幼小連携の科学的思考力涵養のプログラムの実施と改善に関する取り組み状況

幼小中一貫型教育プラン「幼小連携の科学的思考力涵養のプログラム」によって、幼小の合同保育・授業の展開と改善が積極的になされており、幼児期から児童期の発達や学びの具体的な姿（「A 発見と問題解決（①好奇心・試行錯誤 ②論理的に理由付けされた行動）」、「B 言葉への関心（①話すこと・聞くこと ②書くこと）」、「C 数量と図形（平面・立体・空間）（①数理的な見方や考え方や表現 ②数えること・まとまりで把握すること（分離量や連続量）③図形（平面・立体・空間）④パターンと組み合わせ）」、「D 協同的感性（①協同的な言葉や表現 ②人間を理解し関係を調整する力（21 項目）」）を可視化し、幼児期の遊びや活動から学びへのプロセスを解明しようという試みなど優れた取り組みであると判断される。

評価項目 2 保健安全管理

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4 段階評価中の「A 十分達成されている」と判断された。

(評価結果の根拠・理由)

観点 2-1 保健計画の作成・実施の状況、園の環境衛生の管理状況

新型コロナウイルス感染症が「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」上の 5 類感染症に移行したことを受け、感染対策を実施した上で 3 年ぶりにおやつの部屋を再開した。食育については、保健指導や食物アレルギーへの対応を個別に行い、職員研修による資質向上に努めている。保健室では学校保健計画に基づき月ごとの指導計画を立て、健康診断の実施や疾病予防の取り組みを行っており、家庭へ配布する「ほけんだより」（別添資料 2-①）も幼児と保護者が一緒に読めるように工夫している。園の環境衛生については、学校薬剤師による指導や環境安全管理に努めていることなどから、優れた取り組みであると判断される。

観点2-2 危機管理対策の見直しと強化

「令和5年度安全管理計画―危機管理マニュアル―」（別添資料2-②）を年度当初に周知徹底するとともに、問題点や課題を考察し、次年度に反映させるなど危機管理対策の見直しと強化を図っている。定期的な安全点検や防災・避難訓練（資料2-②）を実施することにより事故の防止に努めるとともに、幼児に対しても安全な避難の仕方を身に付け、生命や身体を守ることの大切さが分かるように指導している。また、毎月20日の学校安全の日には、教職員が複数体制で園内の安全点検を実施し、危険箇所などは速やかに修理・修繕をしていること、年6回の防災・避難訓練の実施、心肺蘇生・救急処置実技講習への全教職員参加に加え、ヘルメットの購入や園内4カ所に非常通報装置を設置するなど、安全管理の強化が十分に図られていることなどから優れた取り組みであると判断される。

評価項目3 組織運営

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断された。

（評価結果の根拠・理由）

観点3-1 園務分掌や主任制度が適切に機能するなど、園の明確な運営・責任体制の整備の状況

園の運営・責任体制については、園長・部内教頭の統括の下、研究部・教育実習部・教務部に主任と副主任を配置し、リーダーシップが発揮されやすいようにするとともに、全教職員が園務分掌に基づき、園経営に主体的に参加できるようにしている。少ない職員数でも相互に連携しながら園務の能率化・省力化のために常に改善・工夫する中、新型コロナウイルスが感染症法上5類に移行したことを受け、園行事の復活に努めている。デジタル連絡ツールを導入し、職員の業務の軽減に努めていることなどから優れた取り組みであると判断される。

観点3-2 教員のキャリアステージに応じた資質・能力の向上

園が実施している「幼児教育研究会」におけるキャリアステージ（フレッシュ保育者・ミドル保育者・ミドルリーダー保育者・リーダー保育者）に分かれて行う分科会の開催、「幼稚園等教諭教員育成指標モデル」を活用した振り返りなど、保育内容や幼児理解にかかる知識を高めると共に自らのステップアップに繋がる活動であり、キャリアステージに応じた資質や能力の向上に繋がる優れた取り組みであると判断される。

評価項目4 研究と研修

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4段階評価中の「A 十分達成されている」と判断された。

（評価結果の根拠・理由）

観点4-1 幼児教育研究と園内外における研修の実施

本園は「遊誘財」の視点で継続的に研究に取り組み、保育の質向上を図っている。今年度は「遊誘財から保育者の専門性を問う―子どもと創る保育のために―」をテーマにオン

ライン会議システムを使用して大学との合同研究会を実施している。その内 5 回は人数制限をせずに園内研究会を公開で実施し、参観者からも高い評価を得ている（別添資料 4－①）。幼児教育研究会はリモートと現地参加のハイブリット形式で開催し、参観者 330 名、リモート参加者 144 名、計 474 名の参加者があり、好評であった（別添資料 4－②）ことなどからも優れた取り組みであると判断される。

観点 4－2 教育委員会並びに幼児教育関係者への研修支援等の状況

徳島県教育委員会の各委員会委員、徳島県教育委員会主催の各研修会への講師及び新規採用研修・新任園長研修会における指導、県内外の研修会への講演講師の派遣、幼児教育の推進体制構築事業、文部科学省委託事業全附連受託研究への協力など精力的に行っており、研究幼稚園・奉仕幼稚園としての使命を十分に果たしていることなどから優れた取り組みであると判断される。

観点 4－3 地域住民への貢献

オープンスクールを実施（参加者：約 104 人）したり、教育講演会「スマホ時代の子どもと子育て（湯地宏樹氏）」を保護者や一般の方に公開したりするなど、地域住民に対しても子育て支援や幼児教育振興に寄与する役割を十分に果たしていることなどから優れた取り組みであると判断される。

評価項目 5 教育環境整備

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4 段階評価中の「A 十分達成されている」と判断された。

（評価結果の根拠・理由）

観点 5－1 設置者と連携した施設設備の安全・維持管理のための整備の状況

今年度は「鳴門教育大学附属学校園授業支援・カメラシステム」の導入により、園内での子どもの活動を録画できるカメラの設置、みどり会（保護者会）の協力のもと園庭の木々の剪定、おやつの部屋配水管処置、警報スイッチ 4 カ所の設置など施設・設備の充実が図られている。複数体制での安全点検が機能しており、教育環境が常に美しく整備され、令和 5 年度附属幼稚園オープンスクールアンケート集計結果（別添資料 1－①）において「環境整備について」94.2%が「よく整っている」と評価していることなどから優れた取り組みであると判断される。

観点 5－2 みどり会（保護者会）との連携

園舎周辺の草抜き、暗渠の砂取り、保育室等の窓掃除、木々の剪定などの環境整備、おやつの部屋の配膳や手づくりおやつの調理、絵本の読み聞かせや絵本の修繕、人形劇講演、手づくりティッシュケース作成、駐車場のスムーズな運営など、保育環境等の充実に大きく寄与している。令和 5 年度幼稚園評価アンケート結果報告書（別添資料 1－②）においても保護者から高評価を得ていることなどから優れた取り組みであると判断される。

評価項目 6 教育実習・インターンシップ等

【評価結果】 以下の内容を根拠として、4 段階評価中の「A 十分達成されている」と判断された。

(評価結果の根拠・理由)

観点 6 専門性や実践力を養う教育実習の実施状況

ふれあい実習（学部 1 年生 5 名），附属学校園観察実習（学部 3 年生 5 名），附属学校園実習（学部 3 年生 5 名，大学院生 2 年生 1 名），教員インターンシップ（学部 4 年生 2 名），基礎インターンシップ（大学院幼児教育コース 1 年生 1 名），総合インターンシップⅠ・Ⅱ（大学院子ども発達支援コース 2 年生 3 名），教育体験実習（学部 4 年生 1 名），幼児教育実践フィールド研究Ⅰ・Ⅱ（遠隔教育プログラム）と多数の実習生を受け入れており，実地教育計画表及び ICT の活用や「主免教育実習「評価ルーブリック」（附属幼稚園）」（別添資料 6-①）による自己評価に基づき，教育実習主任をはじめ担任による指導のもと，計画的に実習が行われている。動画配信サービスや日誌をオンラインで大学教員と共有するオンラインシステムなどの工夫がなされており，令和 5 年度幼稚園評価アンケート結果報告書（別添資料 1-②）においても教育実習生に対する肯定的な意見がみられていることなどから優れた取り組みであると判断される。

参考：学校の現況及び目的

I 学校の現況及び目的

1 現況

- (1) 学校名 鳴門教育大学附属幼稚園
- (2) 所在地 徳島市南前川町2丁目11番地の1
- (3) 学級等の構成
3歳児1学級, 4歳児2学級, 5歳児2学級
保育課程 2年保育, 3年保育
- (4) 幼児数及び教員数(令和5年5月1日)
幼児数130人 教員数7人(正規教員)

2 目的

(1) 目的・使命

本園の目的は、附属幼稚園園則第1条において「義務教育及びその後の教育の基礎を培うものとして、幼児を保育し、幼児の健やかな成長のために適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する」と定めるとともに、同条第2項では「幼児期の教育に関する各般の問題につき、保護者及び地域住民その他関係者からの相談に応じ、必要な情報の提供及び助言を行うなど、家庭及び地域における幼児期の教育の支援に努める」と定めている。

また、園則第1条には「鳴門教育大学における幼児の保育に関する研究に協力し、かつ、本学の計画に従い学生の実習等の実施に当たることを目的とする。」と定めており、具体的には教員養成大学の附属幼稚園として、次のような使命をもった幼稚園でもある。

- ① 大学と一体となって、教育の理論及び実践に関する科学研究を行う研究幼稚園としての使命
- ② 地域の教育課題の解明、参観者への指導・助言、文部科学省・県教委・地教委等からの要請による教員派遣など、教育界の発展に寄与する使命
- ③ 鳴門教育大学の学部学生及び大学院生の教育実習等を行う使命

(2) 教育目標

本園は、園則第1条に示されている幼稚園教育の目的の達成のため、次のような教育目標を掲げている。

- ① 自主・自立・創造・感謝の精神の芽生えを養うこと。
- ② 健康でたくましい心身を養うこと。
- ③ それぞれのよさや違いを認め、育ち合う感性を養うこと。
- ④ 身近な環境に対する興味や思考力の芽生えを養うこと。
- ⑤ 喜んで話したり聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うこと。
- ⑥ 創作的表現に対する興味や豊かな感性を養うこと。

(3)めざす子ども像

本園は、教育目標に基づき、次のように「めざす子ども像」を明確に示している。

- たくましい子ども
- しなやかな子ども
- 育ちあう子ども

(4)令和5年度重点目標

鳴門教育大学・附属学校との連携をさらに密にし、中期目標・中期計画・本年度計画等の実現に努めながら、次の3点から教育目標の具現化をはかる。

- ① 幼稚園教育要領の趣旨を踏まえた幼稚園教育の具現化をはかる。
- ② 「遊誘財」研究の成果を生かし、現代的な教育課題に係る研究・実践を推進する。
- ③ 大学、教育委員会との共同研究・研修を推進する。

(5)評価項目

- ① 教育課程・指導
 - ・ 幼稚園教育要領の内容に沿った幼児の発達に即した指導の状況
 - ・ 科学的思考を促す幼小接続の生活プラン（教育課程・指導計画）作成に関する取り組み状況
- ② 保健安全管理
 - ・ 保健計画の作成・実施の状況，園の環境衛生の管理状況
 - ・ 危機管理対策の見直しと強化
- ③ 組織運営
 - ・ 園務分掌や主任制度が適切に機能するなど，園の明確な運営・責任体制の整備の状況
 - ・ 教員のキャリアステージに応じた資質・能力の向上
- ④ 研究と研修
 - ・ 幼児教育研究と園内外における研修の実施
 - ・ 教育委員会並びに幼児教育関係者への研修支援等の状況
 - ・ 地域住民への貢献
- ⑤ 教育環境整備
 - ・ 設置者と連携した施設設備の安全・維持管理のための整備の状況
 - ・ みどり会（保護者会）との連携
- ⑥ 教育実習・インターンシップ
 - ・ 専門性や実践力を養う教育実習の実施状況